

序 文

富岡市では、昭和47年に富岡製糸場が「近代産業発祥の原点」であるという考えのもとに創業100年目を期して片倉工業(株)富岡工場を会場として「近代産業発祥100年祭」と銘打った記念行事を開催し、当工場の歴史を学び、その偉業を顕彰いたしました。

これを契機に翌年から根本資料集の編さんに取り組み、4年後には2,000ページを超える大冊の『富岡製糸場誌』を刊行して、当工場の歴史的・文化財的価値に光を当てるとともに、模範工場としての役割を十分に果たしたことを検証することができました。

富岡製糸場は官営期以降、三井・原合名会社・片倉工業株式会社と所属も変わりましたが、昭和62年3月まで創業期の木骨レンガ造の建物を全面的に活用しながら、115年間も一貫して生糸生産を継承してきた実績があります。これほど長期間にわたり生糸の生産活動を続けた工場は国内には全く類例がないものと思われま

す。平成17年に片倉工業(株)様が建造物一切を富岡市にご寄贈くださったことにより、翌年、敷地全域を富岡市が買い取り、以後当所は富岡市の所管となり、間もなく敷地は史跡、創業当初の遺構群は重要文化財に指定されました。

平成19年1月、「富岡製糸場と絹産業遺産群」がユネスコ世界遺産の暫定リストに記載されましたが、その際、当該資産の「顕著な普遍的価値の検証」という課題が与えられました。

この検証は、一自治体だけでなし得るものではありませんが、本市では以前から模範工場の首長であったポール・ブリュナをはじめとするフランス人技術者達のその後の動静や製出された生糸の輸出先での評価と活用等について関心を持ってはいたものの、なかなか現地に行つての調査研究を実施する機会がありませんでした。

そこで私は、これを一歩進め、平成19年にフランスのセダンで開催されたTICCIH（国際産業遺産保存委員会）の繊維部会に出席する機会を得て、各国からの研究発表の多い中で特にスピーチを許され、富岡製糸場が創設時からフランスの影響を強く受け、製出された生糸はフランスやアメリカの絹文化に貢献したこと、さらにはほぼ完全な形で遺されている当工場の保存活用について熱く訴えることができました。次いで随行した職員とともに世界遺産に登録されているリヨンやパリの建造物の保存や活用状況を視察して資料収集に努めるとともに、富岡製糸場の今後の在り方のヒントを得ることができました。

平成20年には、日仏交流150周年を記念してフランスのパリ日本文化会館主催のシンポジウムに講師派遣の要請があり、富岡製糸場総合研究センター今井幹夫所長と世界遺産推進課の職員を派遣し、映像によって富岡製糸場の歴史と文化を紹介しました。

参加者は、建物群がシステムとして保存されていることに深い感銘を持ったようです。この折、ポール・ブリュナの出生地を訪ね貴重な資料を収集することができました。

平成21年にも富岡製糸場総合研究センター職員らを派遣し貴重な資料を収集するとともに、アルフェリス・ジャパン株式会社のリヨン駐在法人アルフェリスと組織的・継続的な資料調査の業務委託を結んで多くの資料を収集することができました。

本報告書は、現在まで収集できた資料の分析・考察を行った結果を中間報告としてまとめたものであります。大勢の方々に活用されることを祈念し序文といたします。

平成22年3月

富岡市長 岩井 賢太郎